

## 43 済生学舎出身の細菌学者・浅川範彦

について——野口英世の伝染病研究所時代の師

唐沢 信安・殿崎 正明

(一) はじめに

浅川範彦は、北里柴三郎の初期の弟子で、明治二十七年に伝染病研究所に入所している。血清薬院が設立されるや、兼務となつて、「ジフテリアの免疫血清」の研究を行い、実用化に貢献した。

又、「ツツガ虫病」の精密調査を行っている、次に「破傷風菌」について「鶏の破傷風に対する天然免疫原理」及び「破傷風の脳髄に対する作用」なる不朽の論文を書き、北里門下で、第一号の医学博士となっている。

更に野口英世が、済生学舎を卒業し、順天堂から、明治二十一年十月一日に、伝染病研究所に入所した時、色々指導した人物である。

(二) 生い立ち

浅川範彦は、慶応元年一月に、高知県土佐郡秦村<sup>はたしんせん</sup>秦<sup>しんせん</sup>寺部落に生まれた。従兄に中江兆民がいた。明治十六年に高知県立医学学校を卒業し、直ちに上京して長谷川泰の経営する「済生学舎」に一ヶ年間学び、医術開業後期試験に合格した。(満二十歳)

更にドイツ語を五年間学び、帰郷して高知病院に勤務するが、明治二十七年に北里の伝染病研究所に入所し、本格的に細菌学の研究を行った。

(三) 浅川範彦の活躍

明治三十二年に伝染病研究所が国立に移管されると、第三部長となり、三ヶ月間実施される「講習会」の指導に当つた。

研究では、「ジフテリアの免疫血清療法」を実用化し、抗生物質の無い時代に、幼児の急性伝染病であるジフテリアの治療に当つた。

又、「腸チフス」の診断液「ビダール反応液」を開発した。更に「ツツガ虫病」の精密調査を行い、前述の如く、「破傷風」についての脳髄に対する作用及び、鶏の天然免疫の原理につき研究を重ね、北里門下で第一号の

医学博士となった。

当時、大学出身者でなく、私学の卒業生に学位を授けられるのは異例のことであった。浅川の秀でた才能と努力が認められたのである。

又浅川は丹毒の治療液を創製して治療に当たった。

(四) 伝染病研究所の講習会と浅川範彦

北里は伝染病研究所で、細菌学と伝染病学の普及のため明治二十七年より、年三回、三ヶ月間の「講習会」を開いた。

浅川範彦は、北里の講義を速記して、自己の実験と併せて、「実習細菌学」総論一冊、各論上下二冊、「細菌学図譜」一冊、計四冊を出版し、北里柴三郎に校閲を受け、講習会のテキストを作った。

講習会の受講者は、最初五、六名であったが、官立に移管後は、定員二十名とし、年三回実施された。野口英世、志賀潔、秦佐八郎、柴山五郎等も入所と同時に、先ず三ヶ月の講習会で一般講習生と共に実習した。続いて次からは、助手として講習会の準備の裏方として活躍した。済生学舎出身の先輩として浅川は講習会で実際に野

口英世に細菌学・伝染病学の実技を指導した人物であった。

又浅川は「実布埵里亜・血清応用論」なる著書を出版し、抗毒素免疫血清論を教授している。

(五) 浅川の早逝と、「浅川博士奨学賞」

浅川範彦は、明治四十年一月十日、胸部疾患で、四十歳の若さで突然世を去った。

北里は、その死を悼み、浅川の数々の功績を記念するために、学界人、財界人に呼びかけて、募金を集め、明治四十二年より「浅川博士奨学賞」(浅川賞)の制度を作った。浅川賞は毎年選考され、細菌学の業績を讃えた最高学術賞で、昭和三十四年より「日本細菌学賞」と名前を改め、現在も続いている。

(六) 浅川範彦の墓と「顕彰碑」

筆者は今夏、高知市郊外の三宝山の墓地を訪ねその遺徳を偲んだ。更に高知県の衛生局の庭にある顕彰碑を確認した。

(日本医科大学)